

フラッシュ・リカバリ・エリアの特徴と操作 と 残量

※ 以下の5つのファイルは、~~必ず~~RMAN バックアップ・ユーティリティを使用してバックアップを採取すると、フラッシュ・リカバリ・エリアに保存されていきます。

RMAN を使用しない場合には、個別にディレクトリを指定してバックアップを採取します。<http://www.atmarkit.co.jp/ait/articles/0811/27/news141.html>

- ・ RMAN によるバックアップ・セット
(複数ファイルを一括でまとめた形式ファイル)
- ・ アーカイブ・ログ
- ・ REDO ログ
- ・ コントロール (制御) ファイル
- ・ イメージ
(RMAN バックアップによる元ファイルと同じ形式のバックアップファイル)

※ フラッシュ・リカバリ・エリアのファイルは、OS コマンドで物理ファイルを削除しても、Oracle が仮想的に管理しているファイル登録情報には残るので、フラッシュ・リカバリ・エリアのファイルの削除には、仮想的なファイル登録情報も同時に削除する操作が必要です

フラッシュ・リカバリ・エリアに対する情報は、次ページの操作にて表示できます。

表示される内容は、

- ・ フラッシュ・リカバリ・エリアに対する物理ファイル名とパス
- ・ オラクルが論理的に管理する容量限界
- ・ 現在の使用率
- ・ レコード変更などの更新前データを、フラッシュバックとして保存しておく設定時間
- ・ テーブルに対してのフラッシュバック操作の実施設定の有効化

対応する初期化パラメータ

初期化パラメータ	説 明
DB_RECOVERY_FILE_DEST	フラッシュバック・リカバリ領域に対応する物理ディレクトリ先
DB_RECOVERY_FILE_DEST_SIZE	フラッシュバック・リカバリ領域の最大サイズ
DB_FLASHBACK_RETENTION_TARGET	テーブルの更新操作に対して、フラッシュバック操作のための更新履歴保存時間設定値 (分)

フラッシュ・リカバリ・エリアについての情報を表示させるには、
EMDC → [可用性] タブ → バックアップ／リカバリ・セクションの設定・サブセクション中の「リカバリ設定」

[可用性] タブ／

バックアップ・リカバリ

設定

リカバリ設定

↓

メディア・リカバリ

フラッシュ・リカバリ

フラッシュ・リカバリ領域の場所Administrator

フラッシュ・リカバリ領域サイズ3 GB

再生可能なフラッシュ・リカバリ領域0 GB

空きフラッシュ・リカバリ領域1 GB

フラッシュバック・保存期間24 時間

